

追い出された
万能職に
新しい人生が始まりました 4

AUTHOR:

東堂大稀

ILLUSTRATION らむ屋



Oidasareta

Banno-shoku ni Atarashii Jinsei
ga Hajimarimashita

主な登場人物

ジョエル

シタデルダンジョン
城塞迷宮調査団の実質的な
まとめ役。一言多いのが玉に瑕。

アイリーン

シタデルダンジョン
城塞迷宮調査団の団長。
何かと暴走して周囲を振り回す。

ブルトカール君

冒険者ギルドの従魔。
タイドドラゴン
愛らしい可憐小竜。

グリおじさん

ロアの従魔のグリフォン。
傲慢だが実力は規格外。

ピョンちゃん

ウイングラビット
グリおじさんと旧知の翼兔。
ある薬草園を守っている。

ベルンハルト

『望郷』の魔術師。
普段は無口だが、
魔法のこととなると人が変わる。

クリストフ

冒険者パーティー『望郷』の
斥候・剣士。軽薄な外見に
反して真面目な性分。

魔狼の双子

ロアの従魔。
彼によく懐いており、
名付けられる日を待っている。

ロア

本編の主人公。
冒険者パーティー『暁の光』で
万能職を7年務め、追放された。
探究心豊かで気弱な少年。

第十二話 色々な秘密

朝が来る。

しかし、木々に日差しを遮られた森の中は暗く、朝という実感はない。

昨夜はまさに混乱と恐怖の夜だった。

城塞迷宮調査団は、森の中でウサギたちに襲撃された。取るに足らない、子供が狩猟の練習で最初に狩るような普通のウサギたちに襲われ、訓練を積んだ騎士や兵士たちが翻弄されたのだ。

ほぼ壊滅と言っている損害を被り、死者こそ出ていないものの、その機能は一時崩壊した。

唯一、対抗することができたロアと従魔たちの存在がなければ、全員が狂乱状態を起こしてバラバラに敗走して、森の中で行方不明になっていたことだろう。

騎士や兵士たちの頭にはその時の恐怖が焼き付き、それは安全が確保され、休息をとっている今もなお、重い空気を漂わせる要因となっていた。

彼らが目的地としている城塞迷宮は、グリフォンを主とした魔獣の住処である。グリフォンは飛行することによって広い範囲を縄張りとし、その気性の荒さもあって人間にとってはかなり危険な

魔獣だった。

また、その周囲は古戦場だったこともあり、多くの不死者が徘徊する場所になっていた。人間にとっては踏み込めばすぐに死が訪れる、まさに死地と言っている場所だ。

普通であれば、そんな場所にわざわざ踏み込む理由はない。

しかし、一カ月ほど前にアマダンの街にグリフォンが飛来し、混乱を引き起こしたことがあった。一応は、ロアが元々所属していた冒険者パーティーの『暁の光』が従魔にしていたグリフォン、つまりグリおじさんが、パーティー壊滅時に一時的に逃げ出した時の行動として決着がついた。公式発表でもそうなっている。

それは事実なのだが、真実を知っているロアたちが口を噤むことにしたため、曖昧なままの決着となっていた。そのため、裏付けを取る必要が出てきてしまったのだった。

そこで、街に飛来しそうなグリフォンの住処である城塞迷宮を調査し、まだそこにグリフォンがいることを確認して、裏付けに代えることにしたのである。

その確認のために編成されたのが、彼ら城塞迷宮調査団だった。

実のところ、この調査が成功するなどと思っている者は誰もいない。生き残るのも困難な場所、その主の存在を確認するなど不可能と言っているからだ。

あくまでこの調査団は、城塞迷宮に調査団を送ったという言い訳を作るための、いわば生贄のような集団だった。そのため、アマダン伯領の騎士団や兵士たちから、実力不足で役に立たない者や、

様々な理由で目障りとされている者たちが集められていた。

死んでも関与しないどころか、彼らはむしろ全滅を望まれて送り込まれている。

実力がある者も交ざっているが、協調性がないなど集団戦闘に向かない者たちばかりだ。その筆頭が、彼らを率いる立場の瑠璃唐草騎士団なのだから、頭の痛い話である。

そんな調査団に、ロアが同行したことは、調査団にとって不幸中の幸いと言ってもいい。

ロアもまた、商人たちや冒険者ギルドなど、彼のことを目障りに感じた者たちの思惑が交ざり合って、この調査団に参加している。

拒否することもできたが、ロアは条件を付けて参加することにした。その条件とは、この調査が成功した時に、報酬として、自分を見習い職である万能職から正式な冒険者と認めることだった。

彼自身は自分のためにこの依頼をこなしているという自負があるため、調査団のためにやっているという気負いはない。

しかし、ロアがいることが、調査団の者たちの大きな助けになっていることは間違いなかった。

今も、ロアの周りにいる騎士や兵士たちは、彼を目で追っている。監視しているわけではなく、その行動が気になるのだろう。ロアの行動次第で、自分たちの未来が大きく変わることを、彼らは悟っていた。

唯一、昨夜の襲撃でウサギたちに対抗できたロアの存在が、彼らの心の支えになっていたのである。

そんな中で、ロアだけが自分がそんな目で見られていることに気が付いていなかった。

夜明け前に起き出したロアは、横倒しになって壊れた馬車を黙々と解体していた。

薪の炎だけでは手元が見え辛いため、頭上にはロア自身が出した魔法の灯りが浮いている。以前なら灯りを出す程度でもすぐに魔力切れを起こしていたが、今はグリおじさんと魔力を共有しているため大丈夫だ。一日中どころか、数年灯しっぱなしでも問題ない。

ウサギの襲撃によって壊れた馬車は、森の中の通り道を見事に塞いでいた。壊れたまま放置するわけにもいかず、昨夜のうちに、ある程度は野宮の薪にするために兵士たちの手で解体されていた。だが、骨組み部分はほぼそのままだ。

軍用馬車の骨組みは、重い物資や人員を運ぶために魔法で強化されており、そう簡単には解体できないのだった。

今この場で解体できるのは、ナイフに風の魔法を纏わせることができるロアだけだろう。

そのため、ロアがナイフで切って解体し、それを見張りで起きている兵士たちが運ぶという流れになっていた。

本当なら、ナイフに魔法を纏わせられることは隠しておきたかったが、ウサギとの戦いで全員に見られてしまったので、今更だからと気にせずに使っている。

「それにしても、スゲーもんだなあ」

ロアが骨組みを簡単に切り裂くのを見ながら、木材を運んでいる兵士が声を掛けてくる。

ロアはそれに何と返していいかわからず、愛想笑いで応えた。

彼にとってこの力は借り物だ。グリおじさんと従魔契約をした恩恵であり、自分の実力ではない。そう考えている所為で、褒められても手放しには喜べなかった。

昨夜から兵士たちや騎士の一部との関係は良好だ。それまでの険悪な雰囲気は嘘のようだ。

自分たちをウサギから守り、傷も魔法薬で治療したロアを、兵士たちは尊敬の眼差しで見つめてくる。感謝の言葉を伝えてくる者も少なくない。

そんな中でも、瑠璃唐草騎士団だけは違っていた。

彼女たちは、ロアを恨みが籠った目で睨んでくる。自分たちが得るはずだった栄誉を奪ったとでも考えているのだろうか。ただ、実害も口出しも一切ないため、ロアは仕方がないかと諦め気味に放置していた。

「朝から精が出るな！ 冒険者殿！」

また別の声が掛かる。ロアが作業の手を止めて顔を上げると、そこにいたのは男性の騎士だった。昨晚のウサギの襲撃時に、ウサギの存在に真っ先に気付き、その後も必死に兵士たちを取りまとめていた騎士だ。

ここまで調査団の行動を取り仕切っていた瑠璃唐草騎士団の女騎士たちが役に立たないため、本来の仕事ではないものの、昨夜の野宮の指示なども彼が行っていた。今まではば無視されていたロアに、壊れた馬車の解体をお願いしてきたのも彼だ。



彼は瑠璃唐草騎士団員ではなく、この調査団のために臨時で組み込まれた騎士だった。

騎士としての実力はあるように見えるが、何か失敗をしてこの死地に赴く任務を押し付けられたのだろう。鍛えられた身体に適度に切り揃えられた髪という、いかにも騎士らしい真面目そうな感じだが、旅慣れておらずマメに手入れできていないのか、その口元には無精髭が浮いていた。

「おはようございます！」

「貴殿がいてくれて本当に助かった。もう一度礼を言わせてくれ」

彼は大柄な身体を折り、ロアに対して深く頭を下げる。

「やめてください。その……オレも一応は調査団の仲間ですし、これも仕事ですから。礼を言われるほどのことではないです」

ロアはいきなり頭を下げられるとは思っておらず、戸惑い、照れる。

今まで騎士から礼を言われたことなどないため、こういった状況には慣れていない。

それに、半ば無理やりとはいえ、同じ仕事を任された調査団の人間はロアにとって仲間だ。それを助けるのに理由など必要なかった。

仲間は助けるもの。

ロアがやりたい本当の冒険者とは、そういう生き方をしている人間だ。

「しかし、我々が今生きているのは貴殿のおかげだ。頭くらい下げるのは当然だ！」

「いえ、そんな……」

そこまで言われて、ロアはさらに恐縮してしまう。

彼はグリおじさんから色々聞いており、なんとなくウサギの襲撃の裏事情を察している。

ウサギが不殺^{ふさつ}を心がけているのを知っていたため、騎士や兵士たちのように、殺されるかもしれないという恐怖も感じていなかった。だからこそ、接触した瞬間に遥か格上だと感じたあのウサギの王とも、落ち着いて戦えたのだ。

そう思うとどうも詐欺のようで、こうやって頭を下げられると、申し訳ない気持ちが先に立ってしまった。

「高価な治癒魔法薬を使って、ケガ人も助けてもらった。感謝するしかないだろう！」

「あれはオレが作った物なので、全然高くないんです」

「なに!? 冒険者殿は……」

騎士が驚いた表情を浮かべる。

「あ、ロアです！ ロアと呼んでください！ 殿なんて付けてもらえるほどの身分じゃないですし、恐縮するというか……敬語もなしでお願いします！」

「ん？」

唐突に言われ、騎士は一瞬表情を曇^{くも}らせた。しかし、次の瞬間には笑みを浮かべる。

「そうか。それは逆に申し訳なかった。では、ロアくんと呼ばせてもらおう。私はジョエルだ……それで、ロアくんは錬金術師でもあるのだな？」

「はい」

騎士……ジョエルの視線はロアの腰に向いていた。

作業をしていたために、ズボンのベルト通しに付けている、四角柱の生産者ギルドのギルド証が見える位置に来ている。

先ほどの、治癒魔法薬を自分で作ったというロアの発言が気になり、思わずその証を探したのだろう。

ギルド証を付ける位置は、各ギルドで大まかながら決まっている。

これはルールがあるわけではなく、ギルド証の形状と各職業の特性から自然とそうになっていた。

冒険者ギルドであれば、ギルド証は穴の開いたプレートのため、紐^{ひも}などを通して首にかける者が多い。商人ギルドであれば、カード型のために胸ポケットに入れる者が多い。

そして、生産者ギルドの場合は、紐が通せる四角柱のため、ベルト通しに付けて腰にぶら下げる者が多いのだった。

これは、生産者に、下を向いて手先を使う作業をする者が多いことも関係がある。首にかけると邪魔になり、ポケットには道具を詰め込むことが多いからだ。

ジョエルはそのことを知っていたに違いない。

そして、生産者ギルドのギルド証を見て、安心したようだった。ギルド証を持つということは、安定して高いレベルの物を作る証であり、兵士たちが飲んだ魔法薬が問題ない物であったという

証拠でもある。

先ほどジョエルが一瞬表情を曇らせたのも、それに起因している。実のところ、錬金術師というのはそれほど低い地位の存在ではない。正式な階級が与えられているわけではないが、それなり

の扱いを受けてもおかしくない立場なのだ。それなのに自分の地位を低く見ているロアに、ひよつとしたら詐欺まがいの錬金術師ではないかと疑ってしまったのだ。

「その年齢でギルドの二重所屬とは珍しいな。才能に溢れているのだな」

「いえ、そんな……」

ロアは思わず口ごもる。

今回の城塞迷宮の調査を失敗すれば、期限切れで、自動的に冒険者ギルドを追いつけられるなどと言えぬ雰囲気ではない。

何と返答していいかわからず言葉を探していると、急にジョエルの顔が強張った。

「何をしておるのだ？」

「あ、グリおじさん」

背後から声が掛かり、ロアが振り向くとグリおじさんがいた。グリおじさんは昨夜、いつもの抜け出し癖を発動させてどこかに出かけて行った。ロアは、旧知であるらしい襲撃してきたウサギの王か、もしくはその王の主の主に会いに行ったのではないかと考えている。

「今帰ったぞ」

そう言って、グリおじさんはその頭をロアの頬に擦り寄せる。

「ちよつと……え？　酒臭い……」

口からだけでなく、身体全体から酒の臭いが漂ってくる。

グリおじさんが酔って帰って来たことを周囲に知られるとまずいと思い、ロアは声を潜めた。

「旧知の者に勧められて、仕方なく飲んだ。仕方なくだ、本当だぞ？」

「……一応、周囲の敵の調査に出てるって言うてあるんだよ？　酒臭かったら言い訳できなくなるよ……」

グリおじさんが昨夜からどこかに出かけていたことは、周囲の調査を依頼したということにして

いた。この森に入る前であれば、ロアたちは調査団から離れて野営をしていたので、姿が見えなくても気付かれなかったが、森の中では安全のために一カ所に集まって夜を過ごしていた。そのために言い訳が必要だったのだ。

なのに、酒の臭いをさせて帰って来たのでは、調査という言い訳が成立しない。

そもそも、従魔が酒を飲んで帰って来たという時点で、変に思われるだろう。

「風の魔法で臭いは抑えておる。このように密着でもせぬ限り臭わぬ」

そう言いながら、ダイグイとロアに身体を密着させてくる。酔っ払いにありがちなグリおじさん

の執拗さに、ロアは両手で押し退けて抵抗した。

別に本気で嫌がっているわけではないが、一応人前だ。話していた相手を放置して、従魔とじゃれ合っては不快にさせてしまうだろう。

そう思っ、先ほどまで話していたジョエルを見ると、彼は引き攣った顔で固まっていた。

「すみません。話の途中だったのに従魔の相手をしてしまっ。グリおじさん、しつこい」

ジョエルに声を掛けながら、ロアは近くにあった壊れた馬車の木材を手にとると、グリおじさんの頭をボカリと叩いた。

「ひっ……」

叩かれたグリおじさんは平気な顔をしているのに、なぜかジョエルが驚いて息を呑み、喉から悲鳴のような奇妙な音を出した。

「ジョエルさん？」

「……いや、何でもない。豪胆なのだな……」

「？」

真つ青な顔のジョエルにロアは首を傾げた。ロアにとっては、グリおじさんを何かで殴るなどいづものことだ。向こうもどうせ蚊に刺された程度にも感じていない。

「あのー、ジョエル様」

そこに、ジョエルの背後から声が掛かった。少年兵だろうか、兵士にしてはやたら華奢だった。

彼もまた青ざめた顔をして震えている。ジョエルに声を掛けたというのに、視線はグリおじさんに向いているその姿を見て、ロアもやっと二人がグリおじさんに怯えていることに気が付いた。

「何だ？」

「アイリーン様がお呼びです」

「そうか……ロアくん、申し訳ないが失礼させてもらっ」

そう言っ、一度大きく安堵の息を吐くと、ジョエルはロアから離れていった。足早に立ち去る姿を見て、ロアは怯えさせたことを申し訳なく感じたのだった。

「それで、旧知の人っ誰だったの？」

ジョエルを見送った後、ロアは壊れた馬車の解体を再開する。

グリおじさんがロアの傍から離れないために、切り出した木材を運んでくれる兵士たちは近寄って来ないが、後でまとめて処理してもらえばいいだろうと、ロアはそのままグリおじさんに話しかけた。

〈昔の知り合いだ〉

「……そりゃ、旧知なんだから昔の知り合いだろうね。そうじゃなくて、どんな人なのかなと思っ。さ。やっぱりあのウサギたちの主なの？」

ロアは、ウサギたちを率いていたウサギの王にさらに主がいるのか、という疑問も含ませて尋ねてみる。

「まあ、そのようなものだ。時が来たら会わせてやるから詮索するでない」

しかし、グリおじさんははぐらかして具体的には答えてくれない。

ロアとしては、酒を飲んで酔っている今なら口が軽くなっているのではないかと思っただけの話しかけたのだが、それほど簡単ではないらしい。

そもそも、グリおじさんの隠し事は、理由を聞くとほとんどが「恥ずかしいから」とか「秘密がある方がカッコいいから」とか「ちよつとしたイタズラ」だったりする。だから今も、たいした理由があつて隠しているわけではないのかもしれない。

「じゃあ、昨日のウサギたちに襲われたのは何だったの？ オレも巻き込まれたんだから教えてくれるよね？ けっこう苦労したし」

「あれは腕試しだ。この国の人間が無駄に死なないようにやっている」

グリおじさんは、作業をしているロアの肩に頭を乗せて顎の下を擦りつけた。体重をかけてこないで重くはないが、作業の邪魔だ。

「だから、お酒臭いって」

ロアはそれを手で押し退ける。

「ウサギの相手すらできぬ者は、ここから先に進めば確実に死ぬからな。篩にかけておるのだ」

「篩？」

「昔にこの国を守っていたやつと知り合いだな。この国の住人に安易に死なれては寝覚めが悪いの

で、ピョ……この森を守っている旧知の者と相談して、力の足りぬ者はその心を折って追い返すように取り決めた。ウサギたちの鍛錬にもなるので一石二鳥だ。小僧にウサギの王が戦いを挑んだのは、我と同行している小僧に興味を持っただけのようだがな」

「ふーん。まあ、それならいいか……」

ロアはあっさりと納得する。

グリおじさんの言葉を信じるなら、この森の中を通過して要塞迷宮周辺に入って死ぬ者の数を減らしている、ということなのだろう。

悪いことをしているのでなければ、ロアとしては問題ない。

ふと、それだったら、グリおじさんが城塞迷宮を巣にしていた時に、人間を殺さないように指示を出していれば済んだのではないかとも考えたが、すぐにそれは無理だと気付く。

縄張りに入り込む人間を許す魔獣はいない。

そもそも、グリおじさんが縄張りの頂点の存在だったのだとしても、それは力による支配だけでなく、他の魔獣に命令できる権利があるわけでもない。そもそも命令を聞けるような知能が、普通の魔獣にはない。

魔獣は本能で生きている。考えて行動しているグリおじさんや双子はかなり特殊なのだ。

それに、人間だって自分の住んでいる所に魔獣や害獣が入り込めば殺すのだから、逆の立場の時だけ許してもらおうなどというのは、調子が良過ぎる。

こうやって、多少でも死ぬ人間が減るように配慮してもらっているだけでも、かなりの高待遇だと言って良い。

〈小僧こそ、あの者たちと何の話をしていたのだ？〉

グリおじさんの問いかけに、ロアの表情は曇った。

「その……感謝されたんだ」

感謝されたと言う割にロアの口調は弱々しい。そんなロアに納得がいかないものを感じて、グリおじさんは擦りつけていた頭を上げるとロアの目を真っ直ぐに見つめた。

探るようなグリおじさんの瞳に、ロアはそっと目を逸らした。

〈感謝されたことに問題があるのか？ 昨夜の小僧はそれに値する働きはしていたと思うぞ？〉

騎士が手も足も出せなかったウサギたちの襲撃を抑えたのだから、ロアは十分な働きをしたと、グリおじさんは思う。いくら自己評価の低いロアであっても、自分の働きが評価に値することは分かっているだろう。

なのにロアはどこか不安げな表情を浮かべていた。

「そういうわけじゃないけど……大丈夫なのかなって」

〈何がだ？〉

「皆をちゃんと守れるのかなって。感謝してもらって、改めて守りたいと思ったんだ」

〈……〉

グリおじさんは、口を開けて呆れた目でロアを見つめることしかできなかった。

ロアが最初からこの調査団の人間たちを守りたいと思っていたことは、グリおじさんも知っている。それがロアが憧れる冒険者の姿だからだ。

しかし、自己評価の低いロアは、それはあくまで希望であって、自分では達成できるはずがないと半ば諦めていた。

だが、今のロアは自分どころか従魔たちに頼ってでも、絶対に調査団を守りたいと思っていた。感謝されたことで、改めて強くそう思った。

ロアが感じた不安は、守りたいという思いの強さによって現れたものだ。

〈ふふふふ……欲が出たか！ 良い傾向だ！〉

呆れた目から一転して、グリおじさんは笑った。

これはロアにとって良い傾向だろう。

無意識だろうが、今のロアは騎士や兵士を保護対象として見ている。それは自己評価が低いままではありえない話だ。

ましてや、自分ができるかどうか不安に思うなど、それなりにできるという自信がなければ成り立たない。もちろんそれはグリおじさんや双子の力を当てにしているものだろうが、力を借りられるということはそれもロアの力の内だ。ロアだからこそ、グリおじさんたちはその望みのために力を貸すのだから。

少しは意識が変わったかと、グリおじさんはほくそ笑む。

ならば、グリおじさんがすることは決まっている。

〈小僧！ 何を不安に感じる！ 何も不安などないぞ！ 我がいるのだから！〉

まるで肩を抱くかのように、翼でロアの身体を包み込む。酒の臭いがして、ロアは顔をしかめた。

〈辛気臭い顔をするな！ 何か楽しいこと……そうだ、先ほどは時が来たらと言ったが、今夜にでも行くか？ あそこには小僧が好きそうな珍しい薬草があるからな！ 小僧も元気が出ると思うぞ！ 何せ『賢者の薬草園』と言われるくらいで……〉

「え？」

思わず、という風にロアが声を上げた。

〈ぬ？ どうかしたか？〉

「グリおじさんって、やっぱり賢者様に縁がある人と知り合ってたんだね！」

〈ハァ!?〉

自分の失言を悟ったのか、グリおじさんはあんぐりと口を開けて固まった。

「昔の賢者様のお弟子さん？ ウサギの王はその従魔？」

〈何のことか分からぬが……〉

グリおじさんは視線をあらぬ方向に這わして必死に何かを考えているようだった。人間だったら顔色を変えて冷や汗を流しているところだろう。

「でも、グリおじさんって、姫騎士アイリーンの劇に出てくる、昔の賢者様みたいな詠唱を使ってたよね？」

姫騎士アイリーンは昔の有名人であり、現代でもよく演劇になっている人物だ。大きな劇場だけでなく、大衆演劇でも上演される。

その劇の中に、アイリーンと共に旅をしていた賢者が、歌のような詩のような不思議な詠唱を使う場面があった。

グリおじさんは、ロアの知る限り一度だけ詠唱魔法を使っていた。

アルドンの森の事件の最後に遭遇した、巨大なスライムを倒すために、最後に放った詠唱魔法がそれだ。

巨大スライムはあまりに巨大で、あまりに大量の魔力を蓄えていたためロアと双子の魔狼では倒しきれず、最後はグリおじさんの詠唱魔法で倒したのだった。

その時にグリおじさんが使った詠唱が、演劇で使われる詠唱にそっくりだったのである。

劇中でその詠唱は賢者独自の詠唱だと語られており、どんな魔法使いが真似を試みても魔法が発動するはずがない詠唱だった。歌うような詠唱のため、最初にこの演劇が作られた時に、演劇用に演出されたものだというのが定説になっていた。

しかし、グリおじさんはそれにそっくりの詠唱を使って魔法を発動させてみせたのである。

ならば、グリおじさんが賢者に縁がある者と知り合いだと言ったとロアが勘繰るのも仕方ないだろう。

〈待て！あの時小僧は耳を塞いでたはずでは!?〉

「え？まだ気付いてなかったの？グリおじさんの『声』は耳を塞いでも聞こえるよ？」

〈ぐっ……〉

グリおじさんの感覚では、魔獣が詠唱魔法を使うのはかなり恥ずかしいことらしく、詠唱を始める前に、ロアたちは耳を塞いで聞こえないようにしておけと言われた。

しかし、グリおじさんの『声』は本当の声とは違って、耳を塞いでも聞こえたため、ロアはその全てを聞いていたのだった。

ロアは、グリおじさんならすぐにそのことに気付くだろうと思っていたが、そうではなかったらしい。

肝心な時に抜けている憎めないグリおじさんを愛おしく感じ、ロアは微笑んだ。

ただ、微笑まれたグリおじさんというと、ロアのそれが弱みを握った嘲笑に見えて、全身の羽毛と獣毛を恐怖で逆立てる。

〈……飲み過ぎたようだ、我は寝る!〉

ごまかすように大声を上げると、グリおじさんはまだ話したそうにしているロアを放置して、焦ったようにロアの下を離れていった。

「そんなに恥ずかしいことなのかな？」

ロアは不思議そうに首を傾げる。

何にせよ、うやむやのうちにロアの不安は吹き飛んだらしい。

ロアはいつもの調子に戻り、再び作業を始めるのだった。

その後、ロアたちが壊れた馬車を片付けた後も出発の号令はかからず、日は高くなり、深い森にも木漏れ日が差すほどの時間になっていた。

その原因は、今後をどうするかという会議にあった。

ジョエルが呼ばれたのはその会議をするためで、それが延びに延びているのだ。

騎士団長アイリーンと騎士たちは、天幕が張れないため馬車の陰に集まり、遮音の魔法を周囲にかけた状態で話し合っていた。意見が分かれ、無駄に時間だけを費やしている。

今後と言っても、議題はどうやって城塞迷宮まで行くかではない。

もっと根本的な話で、「この先に進むか」、「ここで諦めて帰るか」という話し合いだった。

普通の動物でも最弱の部類に入るウサギにやられ、ロアたち以外はまともに戦うことすらできなかったのだから、こういった話になるのは当然のことだろう。

ロアたちが撃退したことで、完全に心が折れるまでには至らなかったが、それでも先に進んで生き延びられるかを考える機会となった。

グリおじさんの言う「節」が上手く機能したということだ。

この先に進み、城塞迷宮へ行くことを推しているのは、瑠璃唐草騎士団の女騎士たち。対して、

ここで諦めて帰ることを推しているのは、ジョエルを筆頭とする三人の臨時編入された男騎士たち。都合のいい妄想に囚われている女騎士たちに向かって、男騎士たちは現実的に生き残ることを優先させるよう進言していた。

「絶対に無理だ。無駄死にすることになる。諦めて帰るべきだ」

ジョエルが声を荒らげて放った言葉に、女騎士たちは刺すような視線を返す。

「我ら瑠璃唐草騎士団の名誉はどうなる！ このままでは帰れん！」

言ったのは、瑠璃唐草騎士団で最年長の女騎士だった。

彼女はアイリーンの片腕として、騎士団を創立当時から取り仕切っている人物だった。名はイヴリンという。

瑠璃唐草騎士団の中で、本当の意味で騎士として戦える実力を持った唯一の存在と言ってもいいが、アイリーンへの忠誠心が強過ぎて目が曇っている。

アイリーンの言動を全て肯定し、それを正しいと思い込んで行動する。彼女の騎士としての力もアイリーンを守ることに割かれるため、まともな戦闘をしない。実力に反して戦場では役立たずだ。「我らがウサギにすら手も足も出なかったことを忘れたのか？ 冒険者殿が撃退してくれなければ全滅していたのだぞ！ せつかく拾った命だ、引き返すべきだ！」

「それは……」

ジョエルの言葉に、イヴリンは言葉を詰まらせる。

あの襲撃では、アイリーンがいる馬車を守るだけで必死だった。もう一人、魔法使いとしての才能が高い者と組んで、二人がかりで守っていたというのにボロボロにされたのだ。

「……冒険者とグリフォンがいるではないか！ あれらがいれば問題ないだろう！」

言葉に詰まりながらもイヴリンが導き出した答えが、これだった。

「他人に頼り切って何が名誉だ！」

即座にジョエルの罵倒が飛んだ。

女騎士たちの鎧は無残にも歪んで傷つき、所々部品が欠けている状態だ。ウサギたちに執拗に攻撃された結果だ。光をやたらと反射する派手な鎧が、ウサギたちを刺激してしまったのだろう。

すでに治癒魔法で治っているが、ウサギの襲撃直後は、彼女たちの身体にも擦り傷と切り傷が付き、酷い状態だった。

それでも彼女たちが城塞迷宮行きを頑強に主張するのには理由があった。

もう、後がないからだ。

この城塞迷宮の調査を失敗すれば、瑠璃唐草騎士団は解散。そして、再編の可能性も潰すために騎士としての地位も剥奪されて一介の兵士にされてしまう。

そういう約束になっていた。

女騎士たちのほとんどは貴族の娘であり、そうになったら軍を辞めて親元に帰され、落ちこぼれとして扱われることになるだろう。上級貴族の使用人として働きに出される可能性もある。

今までの、式典の警護などで貴族たちから持て囃^{はや}されていた、きらびやかな世界からいきなり底辺に落とされるのだ。

それを彼女たちは恐れていた。

今までは、調査が成功すれば名誉を得られるというアイリーンの言葉を信じ、輝かしい未来ばかりに目が行き、そういった負の要素を現実のものとしてまったく受け止めてこなかった。

これは彼女たちが、無駄に前向きで、自分たちの実力を理解していない者ばかりだったことだけが原因ではない。彼女たちを上手く始末できるように、アマダン伯爵が甘い言葉を駆使して丸めこんだ所為だ。言葉巧みに、良い方向にだけ考えるように誘導された。

しかしウサギたちに翻弄され、ボロボロにされてやっと自分たちの実力のなさを思い知った。現実を見てしまった。

曇っていた目が晴れ、失敗する未来が見えてしまったために、今度は調査の失敗を恐れるようになってしまったのである。

それが尚更、無謀な行動へと掻きたてる。

「ここから先へ行けば死ぬんだぞ？ それでも良いのか？」

脅してでも無謀な行動を止めようと、ジョエルは女騎士全員を視線で制しながら言った。

「覚悟の上だ！ 今までも何度か危険な状態にはなったことがある。それでも何とかなってきたのだ、今回も……」

「今までも貴殿たちの無謀な行動の所為で、どれだけの犠牲が出ていたか分かっているのか！」

覚悟の上と言いながら、甘い考えが透けて見えるイヴリンの言葉を、ジョエルは怒鳴りつけた。

「……戦いの場で犠牲が出るのは当たり前でしょう!? 騎士も兵士も戦うのが仕事なのですから！」
苛立ちを含んだ声でそう発言したのは、アイリーンだった。

彼女は今まで押し黙り、周りの意見を聞いていただけだった。

いや、何も言えなくなっていたと言った方が正しい。ジョエルの意見が正しいと理解しているにもかかわらず、後に引けない状況に言うべき言葉が見つからなかったのだ。

「……それは確かにそうです。しかし、それは守るもののためだ。無駄死には許されない！」

国や、そこに住む人々を守るための戦いであれば、ジョエルは臆^{おそ}したりはしない。

しかし今回はあくまで調査であり、失敗したからと言って、国民が死んだり損害が出たりするわけではないのだ。最悪でも、自分たちが職を失う程度だ。

だが、死ねば無駄死にではない。

「わたくしたちは名誉を……」

「命を失えばそれまでです。勝手に死んだ役立たずと罵^{のの}られ、恥辱^{ちじく}を雪^そぐ機会さえ失うのですよ？」
「……」

「それに貴方たちはウサギに……小動物に襲われても、兵たちに指示を出すことすらできなかったではないですか。団長殿に至っては、襲撃中は怯えて馬車の外に出られなかったのですよ？ そんな

な体たらくで守れるような安い名誉なのですか！」

そう言ってから、自分の言った内容に気付いて、ジョエルは自身の顔を引き攣らせた。

またやってしまった。説得のつもりだったのに言い過ぎた。

言ったことは間違っていないが、今のは間違いなく余計な一言だった。また、やってしまった。

ジョエルは後悔しながらも、どうやって挽回するかを必死で考える。

彼が死地へと向かう城塞迷宮調査団に追いやられたのは、この一言多い癖が原因だった。

騎士として平均以上の能力と強い忠誠心を持っているものの、余計なことを言ってしまった、上司どころか騎士団の上層部にさえ煙たがられてしまったのだ。

たとえ正論であっても、言うべき場を間違うとそれは暴言になる。ましてや、騎士団長が怯えて馬車から出てこなかったなど言えば、侮辱でしかない。

「うるさい!!」

アイリーンが叫んだ。

ジョエルを睨み付ける彼女の目には、涙が溜まっている。

「うるさい！ うるさい！ この調査団は戻ることは許されないのよ！ 先に進むしかないの！

これは決定よ！ 引き返すと言うのなら、脱走兵として扱うわ！ 脱走兵は死罪よ！」

「ですが！」

「うるさい！ 大丈夫よ！ わたくしはアイリーンよ！ アイ、リンなのだわ。何かあればグリ

フォンが救ってくれます！」

アイリーンは自らを、グリフォンを従えた伝説の姫騎士アイリーンに重ね合わせるように、そして自身に言い聞かせるように言い切った。

この調査団の団長は、たとえ役に立たなくてもアイリーンだ。行動の決定権はアイリーンにある。その彼女が言い切ってしまったのだから、逆らうことは許されない。逆らえば、彼女の言葉通り脱走兵として扱われ、帰還後に報告されれば犯罪者として扱われる。

こうして、今後の行動が決定されてしまった。

それも、冒険者とその従魔に調査団の命運を預ける形で、だ。

しかし、彼女たちは忘れている。いや、その事実気付いてすらいないのかもしれない。

彼女が頼ろうとしているグリフォンが、ウサギの襲撃の時に、主人である冒険者のことすら守ろうとせずに、呑気に寝そべって眺めていたことを。

ロアたちと調査団が森を抜けるために動き出そうとしていた頃。

小さな砦の前に、冒険者パーティー『望郷』のメンバーはいた。

この砦は、ロアのあるペルデュ王国と北方連合国との国境近くにある、北方連合国側の砦である。城塞迷宮周辺の中立地域からも半日足らずの距離にあり、ペルデュ王国と城塞迷宮の両方を監視する砦となっていた。

北方連合国はその名の通り、北方の小国が大国と対等の力を持つために連合した国家だ。

大陸の東方にあるペルデュ王国とは、高い山脈と城塞迷宮を中心としたグリフォンの縄張りではほとんど隔てられている。

その中でわずかに残された、人が行き来できる平地に、この監視砦はあった。

小さな砦だが、名目上はペルデュ王国との国交の重要拠点として扱われている。

望郷のメンバーがここへ来たのは、城塞迷宮周辺に入るにはここに来るしかなかったからだ。
城塞迷宮周辺は、各国が協力して管理している中立地域である。

しかし、望郷の母国であるネレウス王国は面している部分がないため、許可があっても、指定された他国の拠点から入るしかないのだった。

望郷がロアたちと別行動だったのは、ここに立ち寄る必要があったからだだった。

「貴方たちがネレウス王国から依頼を受けた冒険者ですね？」

「そうだ。ネレウス王国の冒険者パーティー『望郷』だ。よろしく頼む」

望郷のリーダー・ディートリヒは握手するために手を差し出したが、それはあっさりと無視された。

彼が向かい合っているのは、北方連合国の役人だ。後ろに二人、護衛を従えている。

向こうは自己紹介をする気がないらしく、名前どころか身分も言わない。ただ、服装などから、それなりに高い地位にいる人間に見えた。痩せて不健康そうな見た目から、文官だろう。

「城塞迷宮^{シタデルダンジョン}に行けるほどの実力があるようには見えませんが、死に行くつもりですか？」

「む……」

ディートリヒは眉根を寄せるが、さすがにここまで露骨だと怒りを煽られているのは分かるので我慢する。

今のディートリヒは人見知りが発動しており、自分本来の直情的な性格を見破られないように、真面目で冷静な性格を演じている。いつもよりは感情を抑えることができた。

「顔に痣^{あざ}など作って、実力が知れますよね」

「……」

顔の痣は、道中でクリストフとケンカした時に殴られたものだ。この旅の準備のほとんどをクリストフに押し付け、ダメ押しにズボンの穴の繕いを頼んだ所為で起こったケンカだった。

実にくだらないケンカだが、被害は下手な魔獣との戦闘より大きい。

赤く腫れていたのが、腫れが引いて青痣として残ってしまった。

ほとんど消えているものの、それでも目立つのは間違いない。治癒魔法で簡単に治せるが、行動に支障がないのと、薬が勿体ないという理由から使っていない。

「それになんですか、その変な模様のズボンは。冒険者は傾いて派手な格好をする者が多いですが、それは年甲斐もなく可愛過ぎるのではないですか？」

ズボンの模様と言うのは、双子の魔狼の足跡のことだ。双子の足跡の形に開いた穴に、布地の裏

から真つ赤な布を当てて縫つてあるため、そういう模様のズボンに見える。

真つ赤な足跡模様の付いたズボンは、ディートリヒの外見にはいささか可愛らし過ぎた。

「……これは、こいつが勝手にやった」

ディートリヒは真顔で、後ろに控えていたクリストフを指差す。

すると、男はわずかに目を細めた。

「なるほど、チャラけた感じの者がいると思いましたが、乙女^{おとめ}心に満ちた方でしたか」

「なっ！」

「そんなことはどうでもいいだろう。本国から許可証が届いているはずだ。早く城塞迷宮^{シタルダンジョン}に入る許可を出して欲しい」

男の言葉にクリストフは思わず声を上げたが、まるで興味がないといったようにディートリヒは話を続けた。

「そうですね。私も忙しい身です。つまらない業務に時間を取られたくありません。手早く済ませましょうか」

「頼む」

「では。北方連合国はネレウス王国の要請により、貴方たち望郷^{シタルダンジョン}が城塞迷宮を中心とした中立地域へ立ち入ることを許可します。これはあくまでネレウス王国の要請によるものであり、北方連合国は一切の責任を負いません。よろしいですね？」

「もちろんだ」

「では、ご自由に。どこへでも行つてください」

「分かった」

許可自体はあっさりとしたものだつた。

もつとも、北方連合国には、事前に書類で望郷のメンバーの身元を知らせており、ここで手間がかかるようでは問題である。

「失礼する」

「御武運を」

とても武運を祈っているとは思えない冷めた表情の男を一瞥^{いちべつ}してから、望郷のメンバーはその場を離れた。

望郷が馬車に乗り込み、城塞迷宮^{シタルダンジョン}に向かう街道を進む姿を見送りながら、男は今までの冷たい表情が嘘だったかのように頬を緩めた。

「……あれが王子なのですか？」

男の後ろにいた護衛の一人が尋ねる。

「一応ね。王子に、宮廷魔術師^{きやうてい}に、騎士が二人とは豪華な冒険者パーティーですね。まったくそうとは見えませんけど」

男は護衛の言葉に答えたが、その視線は離れていく望郷の馬車を追っていた。

「……何か目的があつて偽りを伝えられたのでしょうか？」

「いえ、他国に提出する公文書にわざわざ嘘を書くような真似はしないでしよう。むしろ冒険者として隠れて活動していた者たちが、今回の件で仕方なく本当の身分を晒したと考える方が自然ですね」

「なるほど」

城塞迷宮シタデルダシオンを中心とした中立地域への立ち入りは、国同士の協定によって監視されており、嘘が発覚した時のリスクが大き過ぎる。それに、無意味だ。

「よんどころない事情があつて、高い地位にいる彼らを捨て駒にしたんでしょうね」

「王子を捨て駒ですか？」

城塞迷宮シタデルダシオンは、並の冒険者や騎士では生きて帰って来られない場所だ。

そこに派遣されるのだから、捨て駒という表現は間違っていない。

「あの国は女王からして頭がおかしいですからね。元々は海賊たちが無理やり建てた国です。王族の血に尊さしんぞうはないんですよ。そもそも女王は未婚ですから、王子と言つても養子らしいですしね。海賊船の船長が、目的のために養子の一人を切り捨てたようなものだと考えれば、まあ、普通の出来事ですね」

男が他国を海賊呼ばわりしたことに、護衛たちは納得いかないような表情を浮かべたが、それ以上に疑問の言葉が続けることはなかった。

もちろん、望郷の城塞迷宮シタデルダシオン行きは彼ら——中でもディートリヒの独断であり、ネレウス王国に指示されたものではない。

「さて、国に帰りましょうか」

「はいー」

「面白そうだったので見物のつもりで来ましたが、たいしたことはなかったですね。あの国の人間にしては比較的まともそうな人たちでしたし」

そう言うと、男もまた、その場を立ち去るのだった。

「何だよ、あいつ。いけすかねえ」

馬車がその場を離れてすぐに、ディートリヒは声を荒らげた。自分と仲間をバカにされたのだから、この怒りは正当なものだ。

御者ぎやうはコルネリアがやっており、ベルンハルトも御者台に座って周囲の警戒をしていた。

城塞迷宮シタデルダシオンの周辺に入つたばかりでまだ魔獣の影はないが、それでもすでに魔獣の領域なのだから警戒する必要がある。

そういうわけで、馬車の中はディートリヒとクリストフだけだった。

「八の国の国王。連合国の地位としては、公爵こうくの爵位を持つてるお貴族様だよ」

「はあ？ 何でそんな大物が？」

クリストフがあっさりと先ほどの男の正体を告げたことで、ディートリヒは驚きの声を上げた。北方連合国に参加している国は、各国を平等に統治するという建前の下に、本来の名前とは別に、割り振られた番号を持っている。公式にはそちらの名前で呼ばれることが多い。

この番号は建国された順番に振られており、国力とはまったく関係なかった。八の国というのは、わりと新しい国だろう。

「そりゃ、ネレウス王国の王子様がやってくるんだから、様子見に来たんじゃないか？」

「……素性がバレてるってことか。厄介な」

「てめえ」

ディートリヒが軽く言った途端、クリストフは低く唸るような声を上げた。

急に眼光が鋭くなったクリストフに、ディートリヒが慌てる。

「な……何だ？」

「何だじゃないだろ！ やっぱ、オレが渡した書類を読まずにサインだけしてたんだな？ あの書類にオレたちの素性が全部書いてあったんだよ！ バレたんじゃなくて、こっちがバラしたんだ！」

「はあ？ 何でそんなことを？」

「当たり前だろ！ 公文書だぞ。本当のことを書くしかないだろ！」

今にも胸倉に掴みかからんばかりの勢いで、クリストフが怒鳴る。

一人で城塞迷宮行きの手配をさせられた怒りはまだ収まりきっていなかったらしい。

ディートリヒは、今度こそケンをやるのはやめようと、謝り倒す準備をした。

しかし、次の瞬間にはクリストフは怒りを収め、どこか不安げな表情を浮かべた。

「……まさかと思うが、本国からの条件も読んでないってことはないよな？」

急に声を潜め、ディートリヒに尋ねる。

「条件？」

「やっぱるか。あ、声を落としてくれ。コルネリアに聞かれるとまた怒られる」

「ん？ ああ」

彼は急に態度を変えたクリストフに戸惑ったものの、ディートリヒはその言葉に従った。

「で、だ。本当に本国からの条件を読んでないんだよな？」

「その、怒るなよ。反省してるから」

「それはもういい。オレも忙しさにかまけて確認しなかったんだからな。ただ、読んでないならシヤレにならない。この城塞迷宮行きは、条件付きで本国から認められたものだったんだよ。リーダーが何も言わないから、ロアたちと話し合いをして決めてるもんだと思ってた」

クリストフはディートリヒに身体を寄せるようにして、ひそひそと話し始めた。

「ロア？ ロアに関係あるのか？」

「大ありだ。その……」

最もコルネリアに聞かれたくない部分なのか、クリストフはディートリヒの耳に口を寄せてさらに小さな声でその内容を告げた。

ディートリヒは目を見開く。

「はあ？ …… 本当にか？ そんなロアに…… いや、ロアは許してくれるな。ただあの陰険いんけんグリフォンが……」

「どう動くかまったく予想がつかないな。ロアに上手く抑えてもらわないと」

「確かにコルネリアには聞かせられないな。怒られる」

書類を読みもせずにサインをして、そんな条件を付けられていたなどとコルネリアにバレたら、また正座で説教だろう。そしてディートリヒにちゃんと読んだのか確認しなかったクリストフも、巻き添えだ。

ディートリヒとクリストフは、大きくため息をついた。

「とにかく、城塞迷宮シタデルダンジョンから帰るまではこのことは保留にしよう。悩んでたら思わぬミスをしかねないしな。この場所では命とりだ」

「そうだな。何にしても、ロアに話してからじゃないとどうにもできないしな。ロアを説得してからにしよう。それに、期限はなかったから、いざとなったらバックレよう。本国には努力したと言え…… リーダーの評価はまた地に落ちるけど、今更だからな」

ディートリヒが柵上げの提案をすると、あっさりとクリストフも了承した。

ディートリヒの評価の話しかしないと見ると、彼は全てディートリヒの責任にして切り抜けるつもりなのだろう。しかも、判断もロアに丸投げにする話になってしまっている。

実のところ、許可申請の時に苦勞させられまくった所為で、クリストフはこの件に深く関わりたくない気分になっていた。

丸投げできるところがあるなら、そうしたいと思うのも仕方ない。

普段はチャラそうに見えて真面目なクリストフでも、もう、色々と限界だったのだ。

「そうだな」

クリストフがそれだけ追い詰められた気分になっているのも、全てディートリヒの所為だ。しかし、ディートリヒはそれに気付かず、軽く同意したのだった。

日が上がり切り、頂点を過ぎた頃。

やっと準備が整い、城塞迷宮シタデルダンジョン調査団は森を抜けるために動き出した。

調査団の馬車の数は半数近くに減っていた。

一部の馬車が壊れたことや、馬が逃げたり死んだりしたことで、数を減らすしかなかったのだ。減った馬車の分、兵士たちが歩くことになった。

また、馬を失った騎士たちも、他の騎士の馬に同乗している。鎧をつけた騎士が二人乗るのは馬に負担がかかるが、兵士が歩く速度に合わせるため問題ないという判断だった。ロアはそこまでし

て歩きたくないのかと思ったが、騎士としての矜持^{きやうじ}があるのだろう。

ウサギの襲撃のこともあり、兵士たちの足取りは重く、進みは遅い。

「今日中に森を抜けられるかな？」

「この遅さでは無理かもしれない。まあ、森の中で野営する方が、我らが夜中に抜け出しやすくてありがたいがな」

ロアと従魔たちは、例によって最後尾で付いて行っていた。

調査団の方はウサギがトラウマになっているのか、周囲の草むらが風で音を立てる度に、ビクビクと怯えているが、裏事情を知っているロアたちは気楽なものだ。散歩気分です歩いていて。

時は過ぎ、日が落ちる時間になっても、森を抜けることはできなかった。

ただ、かなり外側に近い位置に来ているようで、鬱蒼^{うつそう}としていた木々が少し疎^{まば}らになってきている。それだけで兵士たちの気分も楽になったようだ。

適度に見通しのいい、野営に適した場所も何とか見つけれられ、昨夜に比べれば余裕がありそうだった。見通しが良いと言っても、ロアとグリおじさんが物陰に隠れて抜け出すことは可能だろう。ロアたちにとっても、最適の場所での野営と言って良かった。

そして、深夜。

ロアとグリおじさんは野営地を抜け出した。

グリおじさんが言っていた、『賢者の薬草園』へ行くためだ。

そこはウサギの王の住処だった。

ロアは抜け出す相談をした時にグリおじさんから色々聞いたが、なんでも大昔に賢者が作った場所で、隠匿されて秘密裏に管理され続けた場所らしい。

ロアたちが通っている森は近年に出来たものだが、その急激な植物の繁殖も賢者の薬草園が関係していた。

ロアたちが賢者の薬草園に向かっていている間の調査団の警護は、双子の魔狼に任せてある。二匹に任せれば、またウサギの襲撃でもない限り問題はない。

それに同じ森の中にいるのだから、グリおじさんなら何かあってもすぐに駆け付けることができる。もともと、この森の中はウサギたちに支配されているため、ウサギたち以外に襲われる危険はほぼないと言っても良かった。

「すごい。きれい」

そうしてロアが連れられてきた場所は、同じ森の中とは思えないほどに不思議な場所だった。

グリおじさんが浮かべている魔法の光に照らされ、周囲の全てが輝いて見える。ロアは驚き過ぎて、月並みな言葉しか発せない。

今、ロアの目の前には、横に太く広がった不思議な木があった。

その巨木の高さはそれほどではない。普通の森でも見られる程度の高さだろう。

しかし、幹だけが極端に太く、小さな村であれば中に収まりそうなほどの広さに根を張っていた。

多数のウサギが、その無数にうねった根の間に住んでいるらしく、そこから顔を覗かせてロアたちを見つめている。

若むして緑に輝く根の間から、様々な色のフワフワとしたウサギたちが顔を覗かせているのは神秘的であり、また癒される雰囲気があった。

空を飛び、巨木の前に降り立ったロアとグリおじさんを見つめるウサギたちの目は、優しい。とても調査団を襲撃してきたウサギと同じ者たちとは思えなかった。

へ小僧。あやつが出てきたぞ

口を開けて周囲を見渡していたロアは、声を掛けられ、グリおじさんの視線の先に目を向けた。そこにいたのは、ロアが戦ったウサギの王だ。

漆黒の毛皮に白い毛が混ざった、タレ耳のウサギ。

その可愛らしくも威厳のある姿は、ウサギの群れの中にも目を引く。

『翼兎』。

見た目はウサギそのものだが、そう呼ばれているウサギ型の魔獣である。ウサギの王が短く鳴くと、グリおじさんはへうるさいとだけ返した。

ウサギの王はロアを真っ直ぐに見つめてくる。

「えっと、こんばんは」

ロアの挨拶に、ウサギの王は優しく微笑んだように見えた。

へうるさいと言っておるであろう。白髪だらけの糞ジジイが

グリおじさんはウサギの王と、聞こえない『声』で会話をしているらしい。口汚く罵っているが、その表情は柔らかい。旧知の友人とのじゃれ合いなのだろう。

そんな姿を愛おしく感じて、ロアはグリおじさんの首元をそつと撫でた。

「ジジイって、お年寄りなんだ？」

へうむ。こやつは可愛らしいなりをしているがな、老人だ。ジジイだ。それも長く生きているだけで尊敬に値しない類の糞ジジイだ。そう思っただけだぞ

その言葉にウサギの王は器用に二本足で立ち上がると、グリおじさんに飛び蹴りをかました。

長く大きな耳が翻り、毛皮のマントのようだ。

小さな翼兎の蹴りが効くわけがなく、グリおじさんは軽く翼でいなしてみせた。

へむ……小僧。こやつが紹介せよとうるさく言うので仕方なく紹介するが、この森の主の『ピョンちゃん』だ。仲良くする必要はないぞ

グリおじさんがそう言うと、ウサギの王こと、ピョンちゃんは満足げに頷いた。

グリおじさんがこの森の主と言っているからには、この賢者の薬草園を管理しているのもこのピョンちゃんなのだろう。

つまり、ピョンちゃんが賢者と縁のあった者であり、グリおじさんが言っていた旧知の者なのだ。ロアは賢者の弟子が出てくると思っていたため、少し肩透かしを食らった気分になった。

ただ、ピョンちゃんという名前は明らかに人に名づけられたものだろう。

元々は賢者の弟子か関係者の従魔で、主人とは死に別れたのかもしれない。それなら死後引き継いだということで、ピョンちゃんがこの主となった経緯も推測できる。

そうでなかったとしても少なくとも、誰かの従魔だったことは間違いないだろう。

ロアはその可愛らしい名前が、先ほど聞いた年寄りウサギだという話と噛み合わず、少し微妙な表情を浮かべた。それと同時にどこか親しみを感じた。グリフォンに『グリおじさん』などと名付けるロアだからこそ抱く親近感だろう。

「ピョンちゃん？ その、よろしくお願いします……でいいのかな？」

「目上として扱う必要はない。敬語は……貴様！ やめろ!!」

突然、グリおじさんが声を荒らげた。

「え？ グリおじさんど……」

ロアは突然叫んだグリおじさんに問いかけようとしたが、その言葉は途切れた。

軽い目眩^{めまい}を覚えた所為だ。

「くそ、やられた！ ピョン！ 貴様謀^{はか}ったな!!」

「クク……グリおじさん、謀ったなんて酷いなあ！ やあ、昨日ぶりだね!」

グリおじさんの『声』の後に、別の可愛い『声』が聞こえてくる。

先ほど感じた軽い目眩^{めまい}と合わせて、ロアはこの現象に覚えがあった。

「……従魔契約？」

「あたり！ 僕はピョンちゃん、よろしくね!」

「あたりではないわ!! 元の名前を上書きして従魔契約するとは、何を考えておる！ 名は契約者との繋がりを作る大事なものだぞ!!」

グリおじさんは怒って前足で踏み付けようとするが、それをピョンちゃんはヒラリと避けると、そのまま耳を翼のように広げて滑空^{かつくう}する。

そして、ロアの腕の中に収まった。

ロアは不意のことで驚きながらも、しっかりとピョンちゃんを抱きしめる。

「やあ！ なかなか良い抱き方をする子だね。いつもあのワンちゃんたちを抱いているのかな？」

「ピョン！ 貴様、何だその口調は！ 先ほどまではジジイ口調であつたではないか！ 小僧もそんなやつを抱くな！ 投げ捨てろ!!」

「え、いや、その」

「グリおじいさんは酷いよね。こんなに可愛い僕を投げ捨てろだなんて。君もそう思うでしょ?」
ピョンちゃんは目を潤^{うる}ませて、腕の中からロアを見上げる。

その可愛らしさに、ロアは思わず頬を染めた。

「小僧！ 惑わされるな！ そやつはジジイだぞ!! 狡猾^{こつぱつ}な計算でやっておるだけだ!」

「うるさいな。グリおじいさんは」

「おじいさんではない、おじさんだ!!」

グリおじさんがピヨンちゃんの耳を嘴で引っ張るが、それを気にする様子はない。ピヨンちゃんは平然と、ロアの胸へとその頭を預けた。

ロアはというと、状況が呑み込めずに戸惑っていた。

なぜこのピヨンちゃんという翼^{ウイング}兎^{ウサギ}が自分と従魔契約したのかが分からない。得をすることはないはずだ。

それに、お互いにそれほど理解できている関係ではない。たった一度、実戦試合のような、馴れ合いを含んだ戦いをしたただけだ。

「えー。グリおじいさんは、僕の倍は生きてるのに」

「そんなに生きておらぬ!」

ロアは首を傾げる。グリおじさんとピヨンちゃんはいったい何歳なのだろう? まったく予測が

つかなかった。

「うるさい!」

ついに、グリおじさんは耳を引っ張って、ロアの腕の中からピヨンちゃんを引っ張り出すのに成功した。そのままボーと投げ捨てるが、ピヨンちゃんは空中で一回転すると、何事もなく着地する。へやっぱり、グリおじいさんは酷いよね。こんなのを従魔にしていると、君の評価まで悪くなっちゃうよ?」

「えっと」

「黙れ。その口調をやめろ。腹が立つ」

「えー。昨日はジジイ口調をやめろって言ってたのに。わがままだな。ねえ、君。グリおじさんから僕に乗り換えない?」

「ピヨン! 貴様!!」

グリおじさんが駆け寄り、再び踏み付けようとした。

しかし、その瞬間に、ピヨンちゃんの雰囲気が変わった。

はしゃぐ子供のような雰囲気だったのに、急に威厳のあるウサギの王のそれに切り替わった。

踏み付けようとしたグリおじさんの足は、一瞬吹いた魔法の風に弾かれる。

「……と、言いたいんだけどね。今の君じゃ物足りない。話をしたくて従魔契約をしたけどね。あくまで仮の契約だ」

その視線は見極めるような、厳しいものに変わっていた。

「グリおじさんは君の自由にさせるつもりらしいけどね。僕はグリフォンを従え、超位の治癒魔法薬を作る君に期待したいんだ。まあ、グリおじさんが僕と君を接触させないつもりなら、諦めるつもりだったんだけどね」

ピヨンちゃんはグリおじさんをちらりと見る。

グリおじさんは思い付きでロアを連れてきただけだったが、ピヨンちゃんはその時を狙っていた

らしい。口惜し^{くや}そうに、グリおじさんは視線を逸らした。

「僕は、この森の本当の主人が欲しいんだよ」

ピヨンちゃんは軽く跳ねると、そのまま耳を広げて風の魔法を纏わせ、空を舞った。

「ほら、この森は素晴らしいと思わないかい？」

大きく円を描くように飛ぶピヨンちゃんを目で追いながら、ロアは周囲を見渡す。

巨木が従える豊かな森。

強い生命の息吹^{いぶき}を感じる、人知を超えた場所。

「ここは賢者の薬草園。生命^{ガオケレナ}の巨木が従える、命を支配するところ。その恩恵により、望まれた人間以外は立ち入ることすら許されない。数多^{あまた}の珍しい薬草が生え、どんな季節でも絶えることはない」

ピヨンちゃんはふわりと舞い降り、ロアの肩に乗る。

「ねえ、君は賢者になって、この森を手に入れたくないかい？」

耳元で聞こえる優しい声は、ロアには悪魔^{あくま}の囁き^{ささや}に聞こえた。

「……賢者？ オレなんかが……」

突然の申し出に、ロアはどうしていいのか分からない。

ただ、ピヨンちゃんが言っている賢者が、一般的に言われている賢者でないことは分かった。間違いなく、本物の賢者のことだ。

国を跨いで崇められ、尊敬される者。深く広い至高^{しこう}の知識を持ち、魔法の深淵^{しんえん}を覗いた者たち。

この世界では『賢者』は称号の一つとしても扱われるが、それはあくまで一般の話だ。それとは別に本当に意味での賢者も存在する。混同されやすいが、それは能力の上で大きな差があった。

本物の賢者はロアには想像もできないほど、雲の上の存在だ。

そんな本物の賢者になれとピヨンちゃんは言っているのだ。

賢者の薬草園。グリおじさんの詠唱魔法から考えて、この薬草園は、姫騎士アイリーンと一緒に冒険した賢者フィリアのものだろう。彼女は旅の途中で貴重な薬草を集めていたはずだ。アイリーンの物語でも、そういった描写がされている。

それが本当なら、ロアにとってどんな財宝よりも価値のあるものだ。

しかし、自分はそれに相応しくないと感じてしまう。

考えるまでもなく、ロアの口からは極自然に「オレなんか」という言葉が漏れていた。

「本当に、君は卑下するんだね。グリおじさんに聞いた通りだね。あの双子のワンちゃんたちも、ちゃんとした従魔になりたくて悩んでいるらしいよ。せめて、その時が来たらすぐに従魔契約ができるように、名前を考えておいてあげてね」

「え？」

不意に双子の魔狼の話になり、ロアはさらに戸惑った。

「まあ、その話は今はいいよ。ただ、君は賢者になれる器^{うつわ}だよ。それだけは認識しておいてね。人